



ひろさわ ゆうこ
廣澤 裕子 さん（蒔田）

食用バラを使ったジャムの試作品をいただきました。とてもおいしく、完成が楽しみです。

「バラの性格は十人十色で、まさしく子育てと同じ。同じ品種でも遺伝

我が子のようにバラを育てる

「私にとってバラは、自分の向上心を奮い立たせてくれるもの。バラへの興味は尽きることがなく、いつまでも心を若く保たせてくれます」と話すのは、バラ栽培歴約50年の小林幸子さん。森添島の自宅では約600品種800本のバラを栽培し、数々の大会で受賞経験をもつバラのエキスパートです。小林さんが育てた「波山の里」^{はさん}、「信子妃」^{のぶこひ}という2つの品種は新品種として登録され、育種の知識・経験も豊富です。そんなバラへの愛情と情熱があふれる小林さんに話を伺いました。

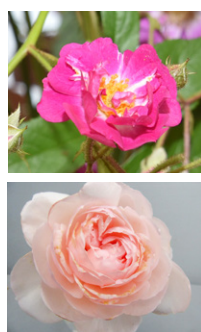
魅力あふれる バラの世界



によって香りや色が異なるため、性格を見抜きながら育て方を変えています」と小林さんは話します。バラは気候や土壌に合わせて育てる必要があります。小林さんも失敗を重ねながら経験を積んだそうです。また新品種の開発は、交配から最低でも4、5年かかるそうで「手をかければかけた分だけバラは応えてくれます。我が子のように愛情をかけ、成長を楽しみながら育てています」と優しい表情で教えてくれました。

バラでつなぐ人の輪

現在は、バラの魅力や生け方、交配の仕方といった技術を次世代につながるとうと、研究会を立ち上げ定期的に勉強会を開催しています。和歌山や九州に住む会員もオンラインで参加しているそうです。また、小林さんが会長を務める茨城バラ会県西で



小林さんが作った新品種「波山の里(上)」と「信子妃(下)」

小林さんの次の目標は、コロナ禍で中止していた東日本大震災復興支援のオーブンガーデンを復活させること。もう一つは、食用バラのブランド品を完成させることです。「普通のバラでもジャムや香水を作ることはできますが、香りが弱く、花びらも固いんです。それならば新しい品種を自分で作ろうと思いました」といきいきと話す小林さんからは、バラへの情熱が伝わってきました。

バラと一緒に歩む未来

は、地域のバラ愛好家で集まり交流を深めています。「バラの魅力を発信し、バラを愛でる人の輪を広げたいです。年を重ねても趣味を通じて新たに友人ができ、自然体で過ごせることが幸せです」と笑顔で話してくれました。



自身が育てた季節のバラで作ったアレンジメントと小林さん。Instagramでは、数々のバラや会の活動を発信。



取材を終えて

「バラは完璧を求めなければ放っておいても咲きます。興味があれば好みのバラを1本から植えて、咲いた花を飾って楽しんでほしいです。難しく考えないで」と、バラへの愛情がこもった一言を伝えてくれました。10月には、茨城バラ会県西による秋のバラ展が開催されます。みなさんも魅力あふれるバラの世界に触れてみませんか。

茨城バラ会県西 秋のバラ展

▼日時 10月26日（土）、27日（日）

午前10時～午後4時

▼場所 道の駅グランテラス筑西多目的室（最終日に飾りバラの無料配布あり）



5月に開催した春のバラ展の様子。バラの香りに包まれながら、切花、鉢植え、アレンジメントなどを楽しめる。